

ドストエフスキー・ノート(1)

1. ものしりじいさん

むかし、新聞に八〇〇字ばかりのコラムを書いていた。そのころのスクラップブックを整理していたら、「ものしりじいさん」というのが出てきた。

「ドストエフスキーについての研究論文の抜き刷りをいろいろな方からいただく。

研究は、ドストエフスキーの『悪鬼ども』の創作上のタネ本はこれとこれだとか、『罪と罰』のストーリーのつくりはこうなっているとか、〈実証的〉で緻密で、参照している文献も広い範囲にわたっている。

それなのに、私はなんとなくの足りなさを感じる人が多い。大学院博士課程あるいは研究者として職についたばかりの、いまこそ大胆斬新な主張を打ち出してもよいはずの若手の人た

ちの論文に、根の深いつよい主観というものが感じられないのである。

〈客観的〉な事実を精密に調べ収集するのは大切である。そのことはいまさら言うまでもない。しかしそうした文献上の事実というものは、執筆者のひかれる問題を照らすものとなってこそ生きてくるのではないだろうか。それなのに、どこにひかれて文献を集めているのか、研究者の主観においてドストエフスキーは何者なのか、論文を書いているこの人は何を考えているのか、——そういう肝心なことが論文を読んでもわからない。私はふと疑ったのだが、この人たちは〈主観をもってはいけな〉などと思いついでいるのではないか。そんなことができずはないのだが、そう思いついでいるとしたら、とんでもない間違いだと思う。〈客観的〉事実なぞいくら覚えたところで、ドストエフスキー通とかいうものしりじいさんになるのが関の山である。

中村 健之介

フェアな主観を育て鍛える、それこそ私たち文学研究者のまず心がけねばならないことではないだろうか」（一九八四年四月十四日、北海道新聞夕刊「魚眼図」）

その後もそしていまも、論文審査や批評の役目にあたる度に同じことを思う。きみはドストエフスキーをどう見ているのか、何を考えているのか。聞きたいのはきみのことばだ。知りたいのはきみの力量と適性なのだから。

2. バカの解釈

ドストエフスキーの小説『白痴』はロシア語で《Идиот》(Idiot)。会話で「イデオート」と言われると、「バーカ」である。ドストエフスキーの時代もそうだった。

『白痴』の主人公ムイシキン公爵はこの世の知恵者から見れば低脳だが神の目から見れば幼子の純真と正しい知恵を保つ人なのだという、通俗キリスト教的な「聖なる愚者」の意味をこめて作者は「イデオート」という題をつけた、というのが広く行なわれている「白痴」解釈である。作中でヒロイン、アグラーヤもそういう「ほんとうは優れているおばかさん」説を支持してこう言っている。「たといあなた（ムイシキン）が、実際にとおつむの具合がわるかったとしても、そうであっても、大切な知恵については、あなたがお持ちの知恵はこの世間のだけ

よりもずっとずっとすぐれているのですもの」。

もうひとつ、こんな解釈はどうだろうか。

ムイシキン公爵が「同情する人」であることは、だれもが認めるだろう。ナスターシャ・フィリーポヴナにも、イポリートにも、ガーニャ・イヴォルギンにまでも同情する。かれは苦しんでいる人に具体的に手をさしのべて相手を助けるわけではない。同情ということがしたい。しないではいられない。

ムイシキンは同情という赤い羽根をつけるエゴストなのか。そうではない。かれは「みんな仲良し」という理想にとりつかれた病者なのだ。ムイシキンにとって同情は保身のための身振りではない。同情は強迫であり、ウィルスであり、かれのからだにはそれに対する抗体がない。だからナスターシャへの同情にとりつかれたムイシキンは社会通念を踏み越え定型の人間関係を引き裂き、混乱をひろげてゆく。危険を感じないわけではない。しかし立ちどまることはできない。

そのムイシキンに『白痴』の登場人物の一人、常識人ラドムスキーがこう言う。

「こんどの事件の一切の根は、第一に、あなたの、いわば生まれつきの未熟さに（公爵、この「生まれつきの」ということばに注意なさってください）、それとあなたの異常なまでの無邪気さ、さらに、めったにお目にかかれなほどの、節度感の欠落にあるのです」。

つまり「バーカ」ではないか。

小説の最後、ナスターシヤ・フィリーポヴナがロゴージンに殺される。同情の受け手を失ったムイシキンは「夢のリアリズムを保証するために」狂気へとびこむ。ナスターシヤの死をいたみ彼女を偲ぶことができるような同情ではなかった。

作者ドストエフスキーは、「読者は意外な結末に多少おどろくかもしれないが、少し考えてもらえば、まさにこういう終わり方をせねばならないのだと、これで当然なのだと思うことでしょう」(一八六八年二月一日、A・マイコフ宛の手紙)と言っている。

ドストエフスキーは若いころにも同じ心理的メカニズムを書いている。『かよわい心』(一八四八年)である。主人公ワシヤ・シユムコフは、ひとの親切を異常につよく感じる体質である。かれは自分のうちの感恩増幅器を調節することができず、ついに「感謝のあまり発狂」してしまう。同情や感謝というからとまどうが、そこにあるのは人間がこわれるほどの、おそろしく敏感な対自(對他ではなく) 感覚である。

3. マルメラードフ

『罪と罰』の「道化」マルメラードフが好きだというドストエフスキー読者は少なくない。私の知っていたまじめな本屋さんも熱烈なファンで、マルメラードフを主役とした戯曲を書き、小劇団を組織して演出をしていたほどだった。

マルメラードフ、そして『白痴』のレーベヂエフや『ステパンコヴォ村』のエジェヴィーキンもそうだが、ドストエフスキーの小説の道化役は人なつこい。偶然出会ったラスコーリニコフやムイシキンにすぐ低い腰でなれなれしく寄つてゆく。そしてお愛想を言うのが上手で、よくしゃべる。マルメラードフの長広舌は「世界的に有名」である。それに連中の話にはわかりやすい名せりふがあつて(「人はどこか行くところがなきやいけません」とか、「人はうれしさが抑えられなくてウソをつくことがある」とか)、読者をちよいとひきつける。道化を演じるだけあつて頭もはたらくのである。レーベヂエフはおしゃべりなだけではない。地獄耳で、ペテルブルグの有名なスキヤンダルなら知らないことがない。

よく観察すると、レーベヂエフに特に明らかだが、道化的人物たちは「よい人に会つてよい人のふりをするのが大好き」(レーベヂエフ)なのだが、チャンスがあると結構いばるし、ウソをつくことをなんとも思っていない。そしてかれらはたえず人をほめたりくさしたりしており、きのうまではロゴージンなんぞはゴミも同然だとけなしていたのに、きょうはロゴージンさまこそわれらがご主人さまだともちあげる。罵倒もお世辞も、自分の利益のために相手に対応しているだけの、取り替えワンタッチのポーズである。もちろん節操とか羞恥心というものはミジンもない。ビヘーヴィアはいばるとぺこぺこするがセットになっているのだが、それが本人としては大事な利益獲得

活動なのである。ドストエフスキーの道化は、おもしろいが、気持ちが変わるようになってくるところがある。

「甘え」をめぐるシンポジウムで、『甘えの構造』の著者土居健郎先生（精神科医）とドストエフスキーの道化的人物について話していたとき、土井先生はこう言われた。

「われわれの〔診療の〕経験からいうと、ああいう人なつこいタイプは案外とすれっからしで、ろくでもない人が多いのです」

またそのシンポジウムの報告書では、「人懐っこさ」のある人間は「為にするとこころがあり」、「面の皮が厚くなって臆面もない」人間が多い、と書いておられる（平川・鶴田編『甘え』で文学を解く、土居健郎「第三部へのコメント」）。これはマルメラードフにぴたりとあてはまる。

ドストエフスキーの道化的人物がよくわかってきた。

4. 寺田透の授業

夜は、寺田透の本を手にとるのが習慣のようになっていた。頭がすっきりする。寺田先生が亡くなられて七年、先生の（考えではなく）「考える」が、時とともに近くに感じられてくる。寺田透は考える人だ。いまもむかしも「家元制度」でものを言う人はめずらしくないが、寺田透は自分で考えて言う。どうしてそう考えるのか問いつつ考える、そここのところの思考の動き

が「考える」だ。寺田透のことばで言えば「フォルムではなくスタイル」。その運動がこちらの頭脳に伝わってきて、頭がトレーナーの指導を受けて体操したみたいになる。

寺田先生の授業はとりたててどうということもない講読だったが、しかし、ふしぎな授業だったといまになって気づく。テキストが道元でもラシーヌでもランボーでもドストエフスキーでも、授業に出ているほくたちはいつも気持ち悪かった。よそでは体験したことのないかろやかな緊張だった。少なくとも、いまそう思い出される。それは寺田先生が授業中も自分で考えており、ぼくたちも一人一人考えていたからだろう。授業のことばには「点の取り合いを演じる」風はまったくなかった。それぞれがひとりごとを言っていたようにも思われる。しかし酔ってはいなかった。意味伝達はなかったが、「考える」をやっていた。それが、共有ではなくいわば共感されていた。寺田先生もぼくたちも情報ではなく自分のことばを発していたのだ。授業がおわるのがちよっぴり残念だったが、何かを学んだとか得たという感じはせず、いつもりんとした気持ちでかろやかに歩き出すのだった。

このごろますます、ドストエフスキーは「考える身体」だったと思う。寺田さんもそうだったけれど寺田さんの「考える身体」は、ドストエフスキーよりはるかに「考える」の抽象性が生き生きしていた。ドストエフスキーの「考える」は「感じる」にひきずりまわされている。トルストイは「ドストエフスキー

はいろんなことを感じすぎた。考えるのはダメだった」と言っている。そのとおりだ。

しかし、というよりだからと言うべきだが、「考える」はダメのドストエフスキーが人間の性質や国民性の核心を並外れたさとの確さでとらえている。小説の人物を見ればすぐわかるし、またたとえば『夏の印象をめぐる冬の随想』のフランス人論もよい例である。世界中の作家たちはそのドストエフスキーの才能におどろいてきた。事実把握力は「考える」ではなく「感じる」にある。これまでドストエフスキー論者たちは、ドストエフスキーの感じる力を考える力だと誤解してきたのであるが。

ドストエフスキーは文字どおり幻想に身をゆだねるときこそ最も生が充実するというヴィジョンネールだが、寺田さんはそうではなかった。ドストエフスキーのような猜疑心やたえざる幻想の襲来による惑乱はなかった。頭がつよすぎて「考える」が一人歩きしてしまうことがまれにあつたが、迷うのでも酔うのでもなかった。のびやかな自立意志や積極的断念は寺田さんの資質だった。

そんな半分ひとりごとみたいな授業で受講生（寺田さんは「授業生」と書く）が目覚めるなんてことがあるのだろうか疑問に思う人は多いだろう。あるのだ。人が目覚めるのは考えの伝授によってばかりではない。頭脳が運動しているときに飛んできたちっちゃな火花でそれは起こるようだ。

いま読んでいるのは『わが中世』。この直立する文体のインパクト！

5. 教育

サンクト・ペテルブルグはネフスキー大通りのカフェで、ゴンチャロフはドストエフスキーに、「わたしにとって大切なのは自分のいくつかの理想と、自分が人生で熱愛したものです。わたしは残されたわずかばかりの時をその愛したものと共に送りたいと思うのです」と語った。ロシアの貴族はそういう立派なことが言えたのだ。

そのときドストエフスキーは、あと五年の生涯であつたのだが、こうつぶやいた。

「しかしわたしは、いまネフスキー大通りを歩いているあの連中のことが知りたいのです」（ドストエフスキーのアルチェーフスカヤ宛の手紙、一八七六年四月九日）。

ドストエフスキーのこの姿勢は、ある年齢になって私を力づけてくれるようになった。それはいつの間にか自分のものにもなってきた。

若者はいま怒涛の現実を渡っている。教師は教養主義などを楯にすましているわけにはいかない。ドストエフスキーの目が必要なのだ。「事実は、いかに混乱しておれ、また偶然的であれ、真実でさえあればいい。未成年の心のうちに一体何が潜ん

でいるのか、推察することができ」(ドストエフスキー『未成年』)。

6. 邪悪な人たち

「総合セミナー」では、毎回新しいテキストを配布して受講生たちと一緒に読み、その場で感想を話し合ったり書いてもらったりしている。

先日はM・スコット・ペック(森英明訳)の『平気でうそをつく人たち』の第三章「邪悪な人たち」を読んだ。ペック博士はアメリカの診療経験ゆたかな精神科医。

数人の学生が「いままでのテキストのうちで感想を書くのが一番むづかしかった。読んでいても苦しかった」と言った。

そうだろうと思う。著者ペックは患者ジョーニーの親であるR夫妻と何度も面談する。どこを突いても夫妻からはミスは出てこない。しかしいつも邪悪な厚い無理解の壁にぶつかっている印象が残る。社会的に見栄えのいい地位をしめているこの夫婦は、「問題がある」息子ジョーニーについて、理解したくない、さらに言えば(ペックから見ても)ウソをついている、と感ぜられるのだが、ペックはそれを証明することができない(相手が認めない)。

ペック博士は少年心理学の専門医を紹介してやる。R夫妻は礼を言う。しかし、結局、R夫妻はジョーニーをその専門医に

みせない。なぜみせなかったのですかと理由を尋ねると、R夫妻はあいまいだが反論しようのないかたちでペックに答える。答えの原型はいつも用意されている。そして夫妻は連携プレーをとる。いつまで経っても、見えない無理解の壁は消えない。ペックはR夫妻が実はジョーニーのことを真剣に心配していないのを感じる。心配しているのは自分たちの体裁である。しかし、感じているその真実をR夫妻と共有することはできない。助言は最初から不要なのだが、相談しているという体裁は必要なのだ。相談は続く。ペックは「邪悪な人は偽装の天才なのだ」と感じるが、その偽装こそかれら自身であり、それとは別の赤裸な心があるわけではない。相談のあとには——それでもコミユニケーションは成り立つ——ただ重苦しい未解決感が残るばかりである。

このような親をもつ子は、自分を破壊するか、あるいは親と同じようになるか、それしか息をする窓はないのではないか。それは親自身についても言える。

著者ペックは、人がその人であることは煮ても焼いてもたべられないどうしようもない事実なのだと身に沁みて感じている。かれが感じるウソは証明できない。悲劇も起こらないかもしれない。この親について語ることは「苦しい」と著者自身が告白している。学生たちもそれを感じたのである。

7. アキーム・アキームイチ論

R夫妻とは一見逆に見えるが、しかしよく似た印象を与える人物をドストエフスキーも書いている。『死の家の記録』の、シベリアのオムスク監獄の囚人アキーム・アキームイチである。「この男はまるでドイツ人のように度外れに理屈っぽくて、きちょうめんであった〔ドストエフスキーはこういう偏見にみちた言い方をしばしばする〕。この男の正義好きなことときたら、常軌を逸していた。不正が目に入ると、自分に関係ないことでもすぐ口をはさむのだった。……行儀よく、きちんとしているという欲求が、この男のそれ以外のすべての人間的な才能と特性を、いつさいの情熱と願望を、完全に呑みつくってしまったような具合だった」

アキーム・アキームイチは想像力が欠如しており、自由の感覚がなく、考えの回路が外へ開かれていないので、どんな問題に出会おうとかれの答えは一つである。異なるように見えても一つである。あらゆる意味で分裂ということがない。そのことをドストエフスキーは「頭がわるいのだ」と言っている。ヘーゲルに言わせれば、精神にディアレクティークが生じようがない。この男と言いつても勝つことはできない。

アキーム・アキームイチは取り立てられて監獄の風紀係りとなり、生き生きとはたらく。

ひよっとするとR夫妻もこのタイプで、正義好きではないが、

単に想像力が欠如していて、思考の回路が閉ざされているだけなのかもしれない。

もう何年も前になるが一年生の授業で『死の家の記録』をとりあげたことがある。最後に感想文を書いてもらったところ、アキーム・アキームイチ論を提出した学生が二人いた。

一人は女子学生で、同級生たちにこうよびかけていた。

「親愛なる〈頭のわるい〉あなた。

私は入学して丸一年がたちますが、その間、実に奇妙な人たちを見てきました。一見するとたいへん真面目で礼儀正しく、人あたりの良さそうな印象を受けます。しかし、すぐにその好印象は破れて中からは……〔……は中村による省略〕

彼らは自分に多くのタブーを課して、また、周囲にもそれを要求します。そのタブーが破られると、先述のモンスターが表皮を食い破って出現するのです。……

ドストエフスキーは『白痴』でこう記しています。〈金持ちで家柄もよく、容姿端麗で教育もある、それなのにまったく才能も特徴もなく、自分自身の理念もない、完全にありきたりな人間であるということくらい、いまましいことはない〉と。

容姿端麗かどうかは疑問ですが、その他はそっくりそのまま皆さんにあてはまります。妙なエリート意識のハリボテの中には、おがくずのようにスカスカポソンの、内容とも言えない内容が詰められており、穴を開けられれば、途端にもろくも崩れ去ってしまいます。それを回避しようと、水面下のバタ足に

自分でも気づかず、美しい仮面を保つのに必死になっている。……人間は強い生き物ですが、その強さは痛みと耐え苦しみを乗り越えることで得られるものです。それを回避し続ければ、心の弾力は失われ、〈頭のわるい〉愚かな人間になることは避けられません。」

もう一人は小学校五年のときに担任教師にいじめられた体験をもつ男子学生だった。

「私の小学校五、六年の担任は、まさにアキーム・アキームイチだった。彼の正義漢ぶりは、生徒である私の眼からみても目に余るものがあった。彼においては、遅刻は許すべからざる罪であった。授業中の私語、掃除さぼり、廊下を走ること、……すべては禁忌であった。それらの罪を犯した場合は、彼による罰が待っていた」。この教師は「陰湿」だった。劣等感があつたからである。顔はやはり仮面のような感じがしたという。仮面は覆っているのではない、表しているのである。そして「目が……」。——人は自分の目つき、口つきを知らない。

この学生は、担任から殴られ蹴られ、廊下に何時間も正座させられた。小学校五年生がである。「私は学校でのいざこざを親に相談して解決するようなことは決してしなかった。ことが大きくなるだけだから」。そしてかれは「日本の教師の多くはこのタイプの人間であろう」と書いている。私はほんとうにおどろいた。

そして次の一節をくりかえし読んだ。

「この種の人間〔アキーム・アキームイチのような人間〕が人の長として上に立ったときの恐ろしさは、想像にあまりがありません」と中村先生はしているが、その恐ろしさに気づくことのできる人間は少数に過ぎない。私のクラスメートは彼〔担任教師〕のもとで次第に品行方正に暮らすようになり、いつまでも適応しない私を蔑みさえしたのだから。彼らは一生、そういう類の恐ろしさとは無縁に過ごすのだろう。だからといって、そのように生きてはならない、などと言うつもりはない。彼らは幸福なのだ。」

一八歳か一九歳で、この事実が言えることに感心した。かれのレポートの題は「幸福な人」であった。

8. サーロフのセラフイム

ロシアのことを。

ロシアにはソールのニール（二四三三―一五〇八）、ザドンスクのチーホン（一七二六―一七八三）など、この世の栄華と喧騒をさけてひとりあるいは少数の同志とともに庵をいとなみ神に祈りつつ生き、かつ訪ねてくる人びとの霊的指導者となる静寂主義者（ヘシカスト）の修道士の伝統がある。その伝統の十九世紀における復興者がサーロフのセラフイム（一七五九―一八三三）であった。

セラフイムがよび起こした修道院を拠点とする信仰復興の熱

い風は教会の外にまで吹いていき、それまで正教会には関心のうすかった知識人たちをも刺激し、知識人たちが各地の修道院に詣でるといふ流行が起きた。サーロフの修道院ばかりではない、有名なのはモスクワの南のオプチナ修道院である。ここは十九世紀ロシアの有名な知識人たちにとってインスピレーションと癒しのための聖地となった。ゴゴリ、スラヴ派のイワン・キレエフスキー、ドストエフスキー、ヴラヂーミル・ソロヴィエーフも、オプチナ修道院を訪ねた。ロシアはまだ半身を宗教的文化 (dukhovnaja kultura) に浸っていた。

二十世紀初頭、一九〇三年、サーロフのセラフイムは聖人に列せられた。ニージニー・ノヴゴロドの南一〇〇数十キロの、鉄道駅からはるかに遠いサーロフの町のその祝典に、皇帝ニコライ二世、皇后アレクサンドラ・フョードロヴナをはじめ多くの皇族貴顕が参列し、ロシア全土から二五万人もの正教徒が集まった。

日本正教会の創建者・宣教師ニコライ(一八三六―一九二二)も、東京でセラフイムの列聖を祝った。

「きょうロシアでは大いなる祝典がある。克肖〔キリストに似ているという意の称号〕サーロフのセラフイム師の不朽体〔聖骸〕が公開される。主よ、日本の教会をも見そなわし給いて、よき働き手を遣し給え。日本の教会を守り、はぐくみ給え。聖セラフイムの祈りによって願いたてまつる。そして克肖セラフイムよ、われらが願いの成らんことを、神に祈り給え。聖セ

ラフイムよ、爾が愛によりて、また憐れみをもってわれらに臨みて、われら罪ある者たちをも見棄て給わざらんことを！」(ニコライの日記、一九〇三年七月一九日/八月一日。前がロシア暦)

この列聖に合わせて日本正教会でもサーロフのセラフイムについての二冊の小冊子が出版された。

最近、二〇〇二年にも、司祭パウエル及川信による『ロシア正教会と聖セラフイム』が出版された。日本正教会でも、セラフイムはいまも霊性の源である。

9. オプチナ修道院の長老アムヴローシイ

P・ズイリヤノフ「十九世紀・二十世紀初頭のロシアの修道院」(北大スラヴ研究センター報告シリーズ、No.57)にオプチナ修道院のことが次のように書かれている。

「サーロフの修道院に続いて名声が高まったのは、カルガ主城区のオプチナ修道院である。一八七〇年代まではこの修道院は、この地方の宗教的中心というにすぎなかった。ところがオプチナ修道院の長老の一人アムヴローシイが全ロシアに知られるようになり、修道院の評判が高まると、長老アムヴローシイに面会しようと、さまざまな身分階層の人々が何千人も訪ねて来るようになった。トルストイやドストエフスキーも訪ねて行った。ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の長老ゾシマに、この長老アムヴローシイの面影を写した。」

『カラマーゾフの兄弟』の長老ゾシマはアムヴローシーがモデルだというのはだれもがする話である。ジョン・ダンロップ『長老アムヴローシー——ドストエフスキーの長老ゾシマのモデル (Starets Amvrosy — Model for Dostoevsky's Starets Zossima)』(一九七二年) は、アムヴローシー師の宗教人としての偉さを書いた一種の聖人伝である。ただしその副題は単なる添えもので、ドストエフスキーのことは書かれていない。

この本には長老アムヴローシーによって癒された人々の話がいくつか収録されている。たとえば、金持の貴族のムーシンIIプーシキン夫妻はオプチナ修道院を訪ねて、一四歳の息子ドミートリーが原因不明の全身の痛みに襲われるのです、どうぞ助けていただきたいのですと、アムヴローシー長老にお願いする。夫妻に「気持を安らかにお持ちなされ」と説くアムヴローシー師は、カウんセラ―風である。そこでは何の奇跡も起きない。ところが帰途について自分の領地の近くまでくると、息子の家庭教師が馬で駆けてきて、坊ちゃんの病気が突然なりました、と告げるのである。そういう奇跡的治癒の「実話」が語り手ワルワラ・ムーシンIIプーシキン夫人の署名つきで発表された。アムヴローシーの名声は高まり人々はオプチナへ殺到した。

それらの治癒談とドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の長老ゾシマの癒しの場面对比すると、ゾシマ長老には奇跡的力はまったく付与されていないことがわかる。

10. クロンシタートのイオアン

治癒力をもつ聖職者に対する崇敬は、十九世紀末二十世紀になってもロシア人の間に広く残っていた。その代表例が有名な長司祭クロンシタートのイオアン(一八二九―一九〇八)である。

世界のロシア研究者の間で信頼されている帝政末期の事典『ブロックガウス・エフロン百科事典』の「セルギエフ」(クロンシタートのイオアンの俗名)の項を摘記紹介してみる。

ヘイワン・イリイチ・セルギエフ、一八二九年生まれ。長司祭にして作家、慈善事業家。病人のための祈禱者としても広く名声を博している。ロシア北部アルハンゲリスク主教区の村の誦経者の子。サンクト・ペテルブルグ神学大学に学ぶ。卒業後、クロンシタートのアンドレイ大聖堂付き司祭となる。現在も同職。長年にわたって、クロンシタートのいくつかの学校の神学教師。多数の談話、説教、教訓集などを出版。一八九〇―九四年には、六巻の『著作集』が出版された。そのうちの数巻はすでに三版を重ねている。その後も多くの著作が出版され版を重ねている。

一八八二年、セルギエフはクロンシタートに「勤労の家」[授産所 Dom trudjubia]を建てた。それは現在、もっともよくできた、整備のゆきとどいた授産所の一つに数えられている。セルギエフについては数え切れないくらいの多種多様なパン

フレット、伝記が書かれている。(『ブロックガウス・エフロン百科事典』第五八巻、一九〇〇年)

「ニューヨーク・タイムズ」のモスクワ特派員を長くつとめたソールズベリーは革命前後のロシア社会史によく通じているが、かれはこう書いている。

「当時(ニコライ二世時代)、宮廷(ならびにペテルブルグ)で降霊術愛好者の大立者はクロンシタートのイワン神父で、彼の個性は強い神秘主義的色彩を帯びていた」(『黒い夜、白い雪』上巻、後藤洋一訳)。

クロンシタートのイオアンはその祈祷による治癒力と慈善活動によってロシア社会の上から下まであらゆる階層に熱烈な信奉者を生み出した。アレクサンドル三世は一八九四年一〇月、イオアン師にみとられて永眠した。次の皇帝ニコライ二世も子どもたちの洗礼はイオアン師に頼んだ。極北アルハンゲリスク県出身のいかにも精悍な感じのイオアン師は、ニコライ二世の妃アレクサンドラの信頼もかちえたのである。「怪僧」ラスプーチンがペテルブルグへやってくるのは一九〇三年であるが、すでに宮廷には「超能力僧」歓迎の空気があったにちがいない。『ブロックガウス・エフロン百科事典』にもあるように、一八九〇年代から続々と出版されたイオアン師の語録や説教集はたちまち売り切れて版を重ねた。

クロンシタートのイオアンは十九世紀末二十世紀はじめのロシアのスーパー・スターの一人だった。帝政末期の高名な歴史

家セルゲイ・シエレメーチェフ伯爵は次のように書いている。

「アレクサンドル三世の時代は、三つの強力な勢力が華々しく活動した時代だった。その三大勢力はそれぞれ豊かな理念や考えの体系を持ち、それらの理念や考えは強力な感化力をもって魔術的なほどの影響を及ぼした。わたしはその三つを同列に並べることにためらいはない。一つの力はレフ・トルストイ伯爵だった。二つめはクロンシタートのイオアン神父、そして三つめがアレクサンドル三世だった。この三つの力が断然明瞭な力だった。それらが人々を惹きつけたその魅惑の秘密の核心を明らかにすることは、奥の深い重大な問題を解く仕事だ。」(『S・D・シエレメーチェフ伯爵の回想』R・ツウルカン編『ここにはロシア人はわたし一人しかいない』189による)。

トルストイは社会の現実には不満だが教会にも西欧にもなびかないロシアを代表し(ゴリキイは正教会に対抗するトルストイこそ「古い」ロシアだという)、クロンシタートのイオアンは宗教的教会的カリスマを、アレクサンドル三世は王権のカリスマを体現していたのだろう。そしてそのいずれもが新しい未来展望を提供する力はなく、内実は古いのだが、しかしそれがロシアの現実であるという限りで大きな勢力を保っていた。革命派は少数派であった。

クロンシタートのイオアンはトルストイを批判して『L・N・トルストイ伯の邪説を暴くために数言』(一八九八年)を著した。トルストイもイオアン神父の人気に対抗して、生涯の最

後に家族をすてて巡礼となることで正教会の聖人とは別種の聖者になろうとした。トルストイの日露戦争反対の声も、イオアン神父に対抗して発せられた気配がある。

11. 日本正教会とクロンシタートのイオアン

ロシアでのイオアンの人気は時をおかず日本にも伝わり、日本正教会においても「露国現代の奇跡者クロンシタットのイオアン長司祭」は人気聖職者になった。

瀬沼恪三郎は一八九〇年（明治二三年）に日本正教会の神学校からロシア（キエフ神学大学）へ留学し、一八九六年（明治二九年）初めに帰国した。瀬沼はロシア留学中に会ったクロンシタートのイオアンについて次のように語った。

「イオアン神父の名が今日のやうに露国国内は云ふに及ばずヨーロッパからアメリカの果てまでも名が高くなったのは、特に露国の先帝アレキサンドル第三世が崩御なぐなられる時からでした。……或時〔アレクサンドル三世は〕クリミヤの離宮から特にイオアン神父をお召しになりました。これは実に破格のことです。御存じの如く、宮中には宮中付の長司祭があつて、聖機密その他宗教上のことは一切その司祭のつかさどるところであつて、民間の司祭が宮中に召さるといふやうなことは例のないことです。それというのもイオアン神父の名が民間に高いとともに宮中にまで響き渡つて、ロシアの宗教界に一大勢力にな

つておつたからです。……

早朝から晩遅くまで引きもきらぬ来訪者に接して降福〔祝福をさずけること〕や祈祷をいたし、あるいはいろいろの頼み、たとえば病者の祈祷に頼まれて往くといふやうなことからして、寸時の閑暇ひまもないのです。私の参つた時、ベルリンからわざわざ参つた婦人がありましたが……一週間旅館に滞留して、やうやく私共の往つたとき始めてあふことができたと言つて喜んでおりましたが、それが何の用かといへば、ただ神父の降福を受けたいといふだけの望みなんです。まあこんな具合で三百六十五日、丸で人潰けになつておらるる。……神父の居らるるクロンシタート港からペテルブルグ府へは川汽船で一時間ばかりかかりますが、先づ時として少し安息やすみのできるのは、この僅かな時間くらいなもので、それも甲板へでも出られたなら、もうたまりません。船中ありたけの人が四方八方から取り囲んでしまひます。

イオアン神父の詳伝はいま、瀬尾君が翻訳中ですから、追つて出版になりませう。」〔瀬沼校長のイオアン神父談〕。山田藏太郎編集発行『使命新報』明治三二年一―一八九九年、第三号―第五号

明治三四、五年にはイオアン神父の『説教集』（木村英吉訳）や『静思録』（上田将訳）など大部の翻訳書が日本正教会から出版されて信徒の間で読まれるようになった。

クロンシタートのイオアンの名はニコライの日記にも出てくる。一八九〇年の正月二日には親しい関係にあつた副島種臣の

家でニコライは「クロンシタートのイオアン師のなした数々の奇跡について」副島に話し聞かせている。また、イオアン師から司祭用祭服をはじめ多くの聖器具が送られてきたなど、関連する記事はかなりある。

「寄贈いただいたものは信徒たちに見てもらうため洗礼式場に展示した。信徒たちはみな、神の僕クロンシタートのイオアン師の名を知っている。」(一九〇〇年七月八日/二二日)

「横浜にロシア軍艦が三隻入港した。……軍艦からわたしのところを最初に訪ねてきたのは、掌院ミヘイ師。……ミヘイ師はクロンシタートのイオアン師にたいへん気に入られている。かつてイオアン師は、出撃準備中の軍艦でミヘイ師が受けた打撲傷を奇跡的に治してくれたという。……今回ミヘイ師がイオアン師のことを語るのを聞いてとてもうれしかった。一二年前と同じように感激をこめて語っていた。ミヘイ師によれば、イオアン師はわたしにもよろしく伝えてほしいと言っておられたとのこと。」(一九〇一年一月九日/二三日)

「キョウフの Japan Daily Mail」に、クロンシタートのイオアンが亡くなった、その埋葬式には二万人からの人が殺到した等々の電信記事が出ていた。日本のいくつかの新聞もそのことを報じている。『国民新聞』にはイオアン師の肖像写真とたいへん好意的な記事が載っている。かくして、ロシアの地の祈禱者にしてわれらが宣教団のための慈善家であった人は、天国の住まいへと移ってしまわれたのだ。」(一九〇八年二月二四日/一九〇

九年一月六日)

この後ロシアはすぐ社会主義国家という衣をまとうのだが、その内側に生きていたのはきのうまでクロンシタートのイオアン師の祝福を受けようと殺到していた人たちだったのである。

12. オピニオンリーダーとしてのクロンシタートのイオアン——G・プローホロフの論文

一九九一年、ソヴェト社会主義共和国連邦は崩壊した。共産党支配と大量殺人の七四年間をくぐりぬけて、ロシア正教会は現代ロシアで勢いをとりもどしつつある。国民の六五パーセントが正教徒になったというニュースもあり、社会主義道徳消滅のあとのロシア国軍にもロシア正教は浸透しつつある。

クロンシタートのイオアンも「復活」した。かれの著作やかれについての評伝などが次々と出版されており、モスクワ、ペテルブルグの大きな書店にはかならずクロンシタートのイオアンのコーナーがある。

クロンシタートのイオアンは、神秘的治癒力を有する「伝統的」カリスマであるが、それに加えて、そのたくさんの著作が示しているように、社会にむかってものを書き語るオピニオンリーダーの面ももっていた。これはロシアの教会人としてはめずらしい。(社会福祉事業家の面もある。)

ニューヨークで出版されている有力ロシア語雑誌『新評論（ノーヴィ・ジュルナル）』一九九九年一月号に、有名なロシア中世文化研究者G・プローホロフの論文「十九世紀末・二十世紀初めのロシアの宗教精神と文化——クロンシタートのイオアンと日本のニコライの二聖人の眼を通して見た」が載った。プローホロフは、私たちが世界で初めて編集刊行した『宣教師ニコライの日記』（ロシア語原文。一九九四年、北大図書刊行会）を読んで、イオアンとニコライを対比している。

その論文でプローホロフは、イオアンの「書き語る聖職者」の面をおよそ次のように紹介している。

「イオアン師はクロンシタートの聖堂での毎週日曜の説教をはじめ数多くの説教、談話を執筆公刊した。かれはロシアでは数少ない「著作する聖職者」の流れを受け継いでいる。……イオアン師は、十九世紀末ロシアの強力なオピニオン・リーダー、社会イメージ提供者だった。」

説教壇のイオアン師はどのようなロシア・イメージを大衆に示していたのか。

「ロシアは、多様な民族を含んでいるけれど、一体であり、帝国を構成するさまざまな民族をロシアの権力の下に平和的に統治している。国民の信仰と敬神の念は、皇帝と皇后がお示しになる手本のおかげで、そして羊たちを思いやる全国各地の司牧者たちのおかげで、強化されつつある。」

慈善施設は毎年数百も新設されている。それに対しては皇族

の方々が庇護の手をさしのべておられる。学業にいそしむ若者たちは勤勉、謙遜、従順であり、将来が大いに期待できる。さまざまな気高い芸術はますます栄え、完成の度を高めている。産業は繁栄し、商業はありとあらゆる生活上の需要を満たしつつある。軍隊は兵士の数も多くかつ勇敢であり、軍事教育は正しくかつ厳格である。農民は熱心に耕作にはげみ、その勤労によつてロシア国家の全階層を養ってくれている」（一八九八年五月六日、皇帝ニコライ二世の誕生日のイオアン師の説教）

イオアン師は、ロシアの災厄の最大の原因は知識人の「腐敗」にあると考えていた。

「現代は不信仰の時代である。多くの人びとが不信仰の菌に冒されている。わがロシアにおいてはとりわけ知識人といわれる人びとがそうである。かれらはおのれの肉なる理性を自慢し、不信心な書物に（とりわけ、不信心者トルストイ伯爵の書物に）読みふけている」

「あなた方知識人は、天上の叡智を置き去りにし、地上の虚しいこと、虚偽、蜃気楼、前途の見えない霧に寄りすがったのだ。あなた方はその無分別のゆえに、その情欲のゆえに罰を受けることだろう」（プローホロフ論文による。）

ロシア正教会は皇帝に仕えて民衆（ナロード）を宗教のマントでつつむ仕事をする国家機関である。クロンシタートのイオアンがうるわしきロシア帝政という大画面をこしらえ、教会にそっぽを向いている知識人を「腐敗」と決めつけるのは、国教

教会の聖職者として当然のことである。

こういう帝政末期の教会的カリスマが現代ロシアで勢いよく「復活」しつつある。もちろんこの動きの背後にはロシア正教会がある。

現代ロシアの知識人は、この動きにどのように向き合うのだろうか。前に引用したように『ブロックガウス・エフロン百科事典』がイオアン師をあくまで俗名の「セルギエフ」としてとりあげ、かれに対する庶民や皇室の崇敬をひややかにながめているのは、明らかに十九世紀末ロシア知識人の態度表明である。

ところが、残酷な世俗化であったソ連時代を経験した現代ロシアの知識人からは、宗教復活に対する批判の声は聞かれない。プローホロフの論文がその一例であるが、かれらはイオアン師の功績を顕彰し、ロシア正教会に対し親近の傾向を示している。いまロシアでは知識人もまた、消されたロシアの過去をとりもどそうと懸命なのである。